2 歴史文学に触れる旅

～『奥の細道』の世界を体験する～

黒田 尚嗣
KURODA Naotsugu
クラブツーリズム株式会社／顧問

300年以上の時を経てもなお愛される『おくのほそ道』。芭蕉が残したものは「そこを訪れた」という足跡だけではない。なぜ芭蕉が旅をしたのか。芭蕉は歴史を意識し、先人（西行）の旅の追体験から「おそれ」に挑み克服した。現代の私たちが『歴史文学の追体験から得る学び』の旅とは？

旅にはテーマと「共感」が重要

交通機関が発達した現代の旅は、車が走れる広い道を利用し、駐車場のある名所旧跡を限られた時間でめぐる旅行が主流となっています。しかし、旅とは本来、時間の束縛から逃れ、知的好奇心に誘われて行きたいところに行くという、きわめて個人的なものです。

また、旅と言えば、想い出に残っている「修学旅行」と答える人が多いかもしれませんが、それは旅行そのものが楽しかったというよりも、親しい友達と寝食を共にした時間が楽しい想い出として記憶されているからではないでしょうか。修学旅行は団体の規律を指導するには良いのかもしれませんが、本来「旅」とはきわめて個人的かつ個人の創意工夫が求められるものなので、学校での指導には限界があるのかもしれません。

人生においては、旅ではなく、放浪する人がいます。両者は似て非なるもので、その違いは目的意識と好奇心の差にあります。例えば、旅を住処とした松尾芭蕉は放浪したのではなく、独自の俳諧を極めるという明確な目的意識を持っていました。私は俳諧修行の芭蕉の旅から、旅にはテーマが必要で、かつ旅で出逢った仲間との「共感」が重要であることを学びました。

旅に生きた松尾芭蕉と西行法師

「月日は百代（はくたい）の過客（くわかく）にして、行（ゆ）きかふ年もまた旅人なり」

この有名な書き出しからはじまる『おくのほそ道』は、俳聖松尾芭蕉が深川の草庵を出立して千住から大垣に至る150日、約600里（2,400km）の旅の紀行文ですが、この一文に、芭蕉の人生観が込められているといっても過言ではありません。

「時は永遠の旅人であり、人生は旅そのものである」と芭蕉は書いていますが、芭蕉は人生の真の意味をつかむために、文学者として生きるべく、草庵を後にして旅に出たのです。

写真1　おくのほそ道　旅立ちの地（東京都荒川区南千住）

写真2　「黒羽芭蕉の館」芭蕉と曽良の像（栃木県大田原市）

写真3　立石寺（山寺）の芭蕉像と句碑（山形県山形市）

この頃の芭蕉の頭の中には、『源氏物語』など日本古来の詩歌や歴史・古典文学がいっぱいつまっており、さらに中国の唐をはじめとする古い時代の詩や「荘子」などの思想書も勉強していたので、人生のわび・さびなどの従来の言葉遊びの俳諧とは異なる世界を模索していたのです。

すなわち、新しい俳諧の道を探るべく、日本の歴史や中国の古典からいろいろ学び、自分なりの新しい世界が見えつつありましたが、まだ何かが足りない、それは何かと考えた時、自分の尊敬する宗祇や西行法師、中国の李白や杜甫もみんな旅に出て、旅の中で彼らの歌や詩が磨かれていったことに気がついたのです。

芭蕉の『おくのほそ道』の旅は1689（元禄2）年で、これは西行の500年忌にあたっており、芭蕉は西行を強く意識し、西行法師の追体験をしていますが、「旅をする職人」「渡り職人」のことをかつては「西行」と呼んでいました。職人は、親方の下で修業を積んだ後、旅まわりをして腕を磨きましたが、これを「西行」に出ると言ったのです。

すなわち、芭蕉は歌枕の地を巡る俳諧修行の「西行」に出たのです。そして西行法師だけでなく源義経など、亡き人々の鎮魂と不易流行の境地を求めてみちのくへ旅立ちました。

『おくのほそ道』の旅に学ぶ

『おくのほそ道』における私の好きな芭蕉の句に**「五月雨を集めて　早し　最上川」**があります。この句は1689年5月29日に山形県大石田の俳諧をたしなむ人たちと句会を開いたときに詠まれたと言われています。そして、芭蕉は『おくのほそ道』に「このたびの風流、ここに至れり」と書いており、みちのくの旅が最上川でピークに達したと自ら言っているのです。

そこで、芭蕉が最初に詠んだ挨拶の句は**「五月雨を集めて　涼し　最上川」**でした。しかし、実際に船に乗ってみると、最上川は穏やかな川ではなく、急流で、しかも降り続いた雨によって増水しており、「水みなぎって、舟あやふし」の川下り体験から、「涼し」を「早し」に訂正して『おくのほそ道』に発表したのです。

私は、芭蕉の俳句を研究すればするほど、芭蕉の感受性と情報収集力に畏れ入るのですが、この情報収集力は旅先での門人や出会った人とのコミュニケーション能力に起因するものです。最上川下りもさることながら、当時のみちのくを安全無事に旅行するには、それなりの旅情報が必要不可欠だったはずで、芭蕉は句会を楽しみながらも、旅情報を得るための質問をしていたはずです。

実際、私も『おくのほそ道』を訪ねるツアーの調査では、往時を想像しながら、芭蕉の足跡をトレースし、現地の方々から情報を集めています。しかし、ツアー造成に限ったことではありませんが、何でも質問すれば良いというものではなく、やはりツインタイムトラベルと言った歴史文学に触れる旅では、正しい質問の仕方があります。

写真4　「最上川下り」芭蕉乗船の地（山形県新庄市）

すなわち、自分でも事前勉強とそれなりの調査をして、自身の考えを述べた上で、質問するのが良いと思います。そうすると答える側も、そこまで調べているのであれば、もっと広く知って欲しいと、親身になって価値ある情報を提供、あるいは他に詳しい人を紹介してくれたりします。

また、芭蕉は『おくのほそ道』の旅において、景色としてはさほど有名でもない歌枕に涙を流して感動しています。それは尊敬した西行の影響を受けて、古代の人の心に触れ、天地流転の中に永遠不変の自然を体感したことと、芭蕉がみちのくの自然の四季とは別に自身の「心」にも四季を持っていたからだと考えられます。

すなわち門人など
「人と接する時は暖かい春の心」
俳句を詠むなど
「仕事をする時は燃える夏の心」
推敲するなど
「考える時は秋のような澄んだ心」
そして自らを振り返る
「自分に向かう時には厳しい冬の心」
を持っていました。芭蕉は旅をしながら、自然の四季を感じるだけでなく、「心の四季」も意識していたのです。

旅においては「どこへ」より「なぜ」が大切

このように芭蕉に多大な影響を与えた西行ですが、『おくのほそ道』の中には直接、西行に言及した記述はほとんどなく、1684年の『野ざらし紀行』の中に、伊勢の西行谷において次のような記述があります。

「西行谷の麓に流あり、をんなどもの芋あらふを見るに、芋あらふ女西行ならば歌よまむ」

芋を洗う女性を西行に比喩しているのは、まだ芭蕉の若さを感じますが、芭蕉は西行の旅を追体験、

写真5　気比神宮の芭蕉像「月清し 遊行のもてる 砂の上」（福井県敦賀市）

写真6　「おくのほそ道」結びの地（岐阜県大垣市）

写真7　弘川寺の西行辞世の句（大阪府南河内郡河南町）

トレースしただけでなく、西行が「どのような気持ちで、その地を訪れたのか？」

「その時、頭の中で何を考えて歌を詠んだのか？」といった、西行の「頭の中で起こっていたこと」まで考えていたようです。

私は、芭蕉は旅において目的地などの「目に見える」部分と、訪れた時に感じた気持ちなど「目に見えない部分」の両方を意識していたと推理します。そこで、歴史・紀行文学の旅を楽しむコツは、芭蕉のようにそこへ行ったことのある人に「そこで何を見てどのように過ごしたのか？」という、目に見える部分だけでなく、「その時に、頭の中で何を考えていたのか？」「なぜ、そこに行こうと思ったのか？」「その時の気持ちや感情、感覚はどうだったのか？」といった目に見えない部分についても質問し、「どこへ」とか「何」よりも「なぜ」に関心を持つことだと思います。

この「なぜ」にこだわると、旅での学びが深まり、芭蕉や西行のように歌には詠めなくても自身の素直な感動を言葉として残すことができます。例えば、旅で感動した際に連想される歌の代表は、西行が伊勢神宮で詠んだと伝わる次の歌です。

「なにごとのおわしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」

西行は花と月をこよなく愛した歌人で、自然や心情をありのまま歌に詠みましたが、この「かたじけなさ」の実感は「畏（おそ）れ」であり、伊勢神宮をはじめとする神社仏閣には、このはばかられる雰囲気があって、その言葉では表せない畏怖感によって人は神社や寺に詣でるのです。

『おくのほそ道』は芭蕉が「おそれ」に挑んだ旅

今日の旅は観光、癒しなど快適・安楽を求めるレジャーの一部になっていますが、昔の旅は、慣れない土地に対する不安や恐怖を伴うことから、「恐れ」に立ち向かう冒険的要素がありました。

すなわち、江戸時代のみちのくの旅も危険と隣り合わせで、西行に憧れて旅をした芭蕉も『おくのほそ道』の中で自身が旅にあって苦行する句を多く詠んでいます。冒頭には「古人も多く旅に死せるあり」と記していますが、もともと古人が旅に死んだのは覚悟の上ではありません。

しかし芭蕉は俳諧に対する求道精神から決死の覚悟で旅に出たのです。これは日本人の武士道精神に通じるものがあり、芭蕉の「惧（おそ）れ」に挑む強い行動力と意志こそが、今も私たちを「芭蕉の足跡をたどる旅」に誘うのです。

歴史を振り返るとこれらの「おそれ」を克服し、畏怖しつつも魅了される「おそれ」に挑む旅こそが人を進化させるのではないでしょうか。芭蕉もみちのくを旅して、心の「惧れ」を克服した結果、「不易流行」という俳諧の本質を発見し、「俳聖」になりました。言い換えれば、『おくのほそ道』という旅こそが芭蕉の人生を変えて「蕉風開眼」を決定づけたのです。

<参考資料>
1）クラブツーリズム（株）俳聖松尾芭蕉の足跡をたどる旅「奥の細道を訪ねて」 クラブツーリズムHP